

おはようございます。賛美歌というシリーズの学びも今日で最後です。一週目は神の偉大さについて学びました。神は、被造物や知恵、そして愛と恵みの中にご自身の偉大さを表わされます。二週目は、イエスという堅い土台の上に人生を築くことについて学びました。先週は、礼拝についてでした。真心から神を礼拝しなければならないことを学びました。今日で最終回となりましたが、今日取り上げる賛美歌のリクエストをいくつかいただきました。昔からある賛美歌や、誰もが知る賛美歌を希望する声がありました。皆さんのご意見と季節柄を考えて、クリスマスの賛美歌にしようとも思いましたが、何だかしっくりきませんでした。一週目にこのシリーズを皆さんにご紹介する中で、このシリーズにたどり着ききっかけとなった「古代および近代の賛美歌」というアルバムについてお話ししました。一週目と二週目は古い賛美歌をご紹介し、先週は割合新しい歌をご紹介しました。今日テーマとするのは、4曲の中で一番新しい曲です。今日のメッセージは、クリス・トムリン作「Our God」（私たちの神）からインスピレーションを得ています。

クリス・トムリンは、パッション 2010 という集会のために準備をしていました。パッションという集会は、アメリカの大学生世代の人たちを中心とする集会です。メッセージや賛美、交わりに満ちた週末を過ごします。クリスはこの集会で何か新しいことをしたいと思いました。数年続くこの集会の企画会議では、ミュージシャンが集まって賛美の歌についてアイデアを出し合います。あるミュージシャンがピアノの前にすわり、自作の曲の一節を弾いていました。これが「Our God」のサビの部分です。クリスはこれを聞き、この曲に秘められた特別な可能性を感じたといいます。クリスはこの曲に歌詞を書きました。今では、教会で多くの人が歌う賛美となり、アメリカのクリスチャンラジオで人気1位となりました。この歌は、「私たちの」神について歌います。今日、皆さんにお話したいのは、まさに「私たちの」神についてです。

この世には、あらゆる神々があります。それぞれの宗教が各々の神を礼拝します。それ以外にも、私たちが神としてしまったものもあります。先日私は「戦う神々」という本を読みました。その中で、私たちが日常生活での普通の営みを神としてしまっていることが書かれていました。そして、私たちが造り上げた神は弱く、助けてはくれないと言います。それは、本当は物事に過ぎないので、私たちが助けることができないのです。そういった物事は、最終的には私たちの期待を裏切る結果となります。金銭や人間関係、財産など、何を頼みとしても、それらはいつか消えてなくなります。手元に何も残りません。今日は、クリスチャンの信仰する「私たちの」神についてお話ししましょう。

この世の神々と神を比べると、一番顕著な違いは何でしょう。この世の神々と神をはっきりと隔てるものは何でしょう。神が私たちとのつながりを求めてくださることだと私は思います。私たちが神とともにいて、一緒に過ごすことができます。今日はこの「神がともにおられる」ということについて考えていきましょう。

1神がともにおられるなら、私たちに怖い敵はない。旧約聖書の中に、神には怖い敵がないことを物語る箇所があります。そのような箇所はたくさんありますが、今日はそのひとつをご紹介します。その話は士師記に登場します。当時、イスラエルの民はミデヤンの圧政を受けていました。この圧政が7年間続いた後、イスラエルの民は悔い改めて神に助けを求めました。神は、ギデオンという名の男をイスラエルの民の指導者としてお選びになりました。主の御使いがギデオンに現れて、神がギデオンを選ばれたことを告げると、ギデオンはイスラエルで最も弱い部族に属する自分が選ばれたことに驚きます。自分は父の家で一番若いとも御使いに言いました。なぜ自分のような者を神がお選びになるのかわからなかったのです。これが神のすばらしいところです。神は取るに足らない弱い者を選んで、強く偉大な者にしてくださいます。ギデオンはイスラエルの民の指導者になりたいとは思いませんでしたが、ミデヤン人から民を救えると神が証明してくださるならと言いました。

士師記 6 : 11-18

6:11 さて【主】の使いが来て、アビエゼル人ヨアシュに属するオフラにある櫪の木の下にす

わった。このとき、ヨアシュの子ギデオンはミデヤン人からのがれて、酒ぶねの中で小麦を打っていた。6:12 【主】の使いが彼に現れて言った。「勇士よ。【主】があなたといっしょにおられる。」 6:13 ギデオンはその御使いに言った。「ああ、主よ。もし【主】が私たちといっしょにおられるなら、なぜこれらのことがみな、私たちに起こったのでしょうか。私たちの先祖たちが、『【主】は私たちをエジプトから上らせたではないか』と言って、私たちに話したあの驚くべきみわざはみな、どこにありますか。今、【主】は私たちを捨てて、ミデヤン人の手に渡されました。」 6:14 すると、【主】は彼に向かって仰せられた。「あなたのその力で行き、イスラエルをミデヤン人の手から救え。わたしがあなたを遣わすのではないか。」 6:15 ギデオンは言った。「ああ、主よ。私にどのようにしてイスラエルを救うことができます。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。」 6:16 【主】はギデオンに仰せられた。「わたしはあなたといっしょにいる。だからあなたはひとりを打ち殺すようにミデヤン人を打ち殺そう。」 6:17 すると、ギデオンは言った。「お願いします。私と話しておられるのがあなたであるというしるしを、私に見せてください。 6:18 どうか、私が贈り物を持って来て、あなたのところに戻り、御前にそれを供えるまで、ここを離れないでください。」それで、主は、「あなたが戻って来るまで待とう」と仰せられた。

16 節で神がギデオンに何とおっしゃったか気づきましたか。「わたしはあなたといっしょにいる。だからあなたはひとりを打ち殺すようにミデヤン人を打ち殺そう。」神はギデオンと戦いの間ともにおっしゃいました。神はギデオンと一緒に行ってくださるのです。ギデオンがひとりで戦うことはありません。7 章には、ミデヤン人と戦う兵士をギデオンが選ぶ場面があります。聖書は、ギデオンには元々3万2千人の兵がいたと語ります。7:2-3 でこのようなことが起こります。「7:2 そのとき、【主】はギデオンに仰せられた。「あなたといっしょにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った』と言って、わたしに向かって誇るといけないから。 7:3 今、民に聞こえるように告げ、『恐れ、おののく者はみな帰りなさい。ギルアデ山から離れなさい』と言え。」すると、民のうちから二万二千人が帰って行き、一万人が残った。」

ギデオンには、3万2千という大きな兵がいましたが、そのうちの2万2千人は戦いに行くのを恐れていることがわかりました。彼らは逃げてしまったので、兵は1万人に減りました。それでもまだ多すぎると神はおっしゃいました。1万人の兵で戦えば、自分たちの力で勝ったと人々は思うだろうと神はおっしゃいます。そうならないために、神はギデオンに兵を川へ連れて行き、水を飲むように言われます。そして、犬のように川に顔を近づけて舌で水をなめる者は帰らせるように命じられました。手で水をすくって飲んだ男たちだけがギデオンとともに戦いに出かけるというわけでした。手で水をすくって飲んだ人の人数はたった300人でした。ギデオンはきっと300人の兵を見て、神は何をなさるのだらうと思ったに違いありません。3万2千人もいた兵がほんの一日で300人に減ってしまったのですから。それでもギデオンは、ともにいてくださるという神の約束を信頼しました。夜になり、ギデオンは山の上からミデヤンの陣営を見降ろしました。聖書には、ミデヤン兵の数は記されていませんが、いなごのように大ぜいの人々と海辺の砂のように多くて数えきれないほどのらくだがいたと語ります。このおびただしいミデヤンの軍勢を、神はたった300人の兵で打ち倒されたのです。

私たちが仕え、礼拝しているのはまさに、ギデオンに語られたこの神です。ギデオンに「わたしはあなたといっしょにいる。」とおっしゃった神が今、私たちとともにおられます。あなたは今、どうにもならないと思う状況に直面していますか。勝ち目のない戦いの中にいますか。乗り越えられない問題を抱えていますか。ギデオンの話は、神がともにおられるなら、私たちに怖い敵はないと教えてくれます。私たちが負けの人生を送ることを、神は望まれません。「生きるのがつらい。かわいそうな私」と言ってしまう生きていくのを、神は望んでおられません。私たちが勝利の人生を歩むのを神は望まれます。罪に勝つ生き方、不安やストレスに負けない生き方を望まれるのです。

2.神がともにおられるなら、私たちは安全である。ダビデは、よく知られる聖書の登場人物のひとりです。彼の人生は波乱万丈と言えるでしょう。羊飼いの少年から王となり、獅子や熊、巨

人を倒しました。王に仕え、王の息子と親友になりましたが、すべてが順風満帆には進みませんでした。ダビデが仕えた王がダビデに嫉妬し、彼を殺そうとしました。ダビデが王になったときも、実の息子に謀反を起こされました。彼の周りには敵ばかりでした。これほどトラブル続きの人生でも、ダビデは詩篇 27：1-3 にこのように記しています。「27:1 【主】は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。【主】は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。27:2 悪を行う者が私の肉を食らおうと、私に襲いかかったとき、私の仇、私の敵、彼らはつまずき、倒れた。27:3 たとい、私に向かって陣営が張られても、私の心は恐れない。たとい、戦いが私に向かって起こっても、それにも、私は動じない。」この個所に、ダビデが神を心底信頼していたことが表れています。ダビデは、神のうちに安全があることを心得ていました。神がダビデの救いです。そして、私たちの救いでもあります。

この個所は、神が私たちの光であると語ります。光は暗闇でどんな役割を果たしますか。暗闇の存在を消します。夜に家に帰って灯りをつけると、家の中はもう暗くありません。私たちの人生も同じことです。神という光をつけるなら、疑いの闇は消えます。恐れは、恐れるものはないという確信に変わります。失望の闇は希望の光に、不安の闇は神の平安に換わります。神が私たちの救いです。

神は、罪とその力から私たちを救い出してください。霊の死から私たちを救ってください。私たちが神を信じると、死んだらたましいはどうなるのかという恐れを抱かなくてよくなります。神は、希望のない存在であった私たちを救ってください。神がいなければ、人生は無意味です。あてもなくこの世をさまようだけです。けれども、神がおられるなら、天国に行く期待を持って生きられます。

神は私たちを守ってください。さきほどの個所で、神が敵から守ってくださったとダビデは語ります。ダビデは、自分の肉を食らおうとする敵や悪を行う者について記します。けれども、倒れるのは敵のほうだとダビデは確信します。彼に敵対する軍がいても、神を頼りにしているから恐れないと言います。私たちは、ダビデのように、周囲を敵に囲まれてはいないでしょう。この教会で、軍を相手に戦っていたり、どこかの国王に命を狙われたりしている人はいないと思います。もしそんな人がいたら祈りますので、マイボイスカードか祈りの輪ですぐにご連絡ください。

とは言え、私たちもなんらかの敵と向き合います。その敵は誘惑かもしれません。誘惑は、すべてのクリスチャンの敵です。神は誘惑から私たちを守ることがおできになります。誘惑と戦う私たちを助けてください。弱さも私たちの敵です。誘惑を受ける上に、私たちは弱いので誘惑に負けてしまいます。自己満足も私たちの敵です。自己満足のせいで、神との歩みが停滞してしまいます。水の流れがない沼地を見たことがありますか。水が汚くなってひどい状態になります。そうすると、沼には生物がいなくなります。すると魚の腐ったような悪臭を放ちます。クリスチャンの人生も停滞すると腐っていきます。人々が引き寄せられる芳しい香りではなく、人のいやがるものになってしまいます。クリスチャンは不信仰という敵にも苦しめられます。不信仰になると、神を疑い、神が助けてくださることを信じられなくなります。

クリスチャンに悪影響を与えるこれらの問題の根源はひとつです。それは私たちの敵サタンです。サタンはクリスチャンを喜んで誘惑します。私たちの弱さを見つけて喜びます。私たちがキリストとの歩みで前進しなかったり、不信仰になったりするのを喜びます。けれども、サタンは神より強いわけではありません。私たちが神にしっかりつかまって、神の約束を信頼し続けるなら、私たちはサタンから守られます。ヨハネ第一 4：1-4 にはこうあります。「4:1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。4:2 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。4:3 イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。4:4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。」神はサタンより偉大なお方です。また、神は私たちを危険から守ってください。

アフリカのアンゴラに宣教師がいました。2002年、4人の家族が内戦に苦しむアンゴラに到着しました。内戦のため、武装した番人が護衛する聖書学校の敷地内に一家は住んでいました。ある夜、眠れなかった一家は祈り始めました。午前1時ごろ、ようやく眠りについた一家でしたが、もう一人の宣教師が扉を叩く音で目覚めました。武装した番人が強盗に打たれたというのです。番人を病院に運んで手当てをしたので、番人は一命を取りとめました。しかし、武装強盗にいつ襲われるかわからない状態が続きました。その後何週間も、毎晩家の鍵が閉まっていることを確認し、不審なことがないか窓から外の様子を伺いました。武装強盗が押し入ってこないかと不安な日々を送りました。このようなことが何週間も続きましたが、強盗は来ませんでした。彼らは、なぜ強盗が入ってこなかったのか、自分たちがどのようにして守られたのか不思議に思いました。後になって、敵の一人から話を聞くことができ、それによると、普通では考えられない大きさの番人が5人、それぞれの入口にひとりいたというのです。敵はこの番人を怖がったので、敷地内は守られました。宣教師たちは、この5人の番人は神が送ってくださった御使いたちに違いないと思いました。こうして彼らは、アンゴラでの働きを続けることができました。

3.神に不可能はない。 ここで皆さんに言うておきますが、これは私たちの願いを神が思いどおりに叶えてくださるという意味ではありません。神は願いを叶えてくれる魔法使いではありません。「神様を信じるから、ずっと欲しかったものをください」と言うことはできません。ここでいう不可能はないとは、そういう意味ではありません。神は、私たちが神を知るための道を備えてくださいます。

クリスマスを前にした今、私たちはイエスのご生誕を祝います。イエスのご生誕の奇跡をじっくり味わう時間を取っていますか。イエスの誕生に関するみことばを少し読みましょう。

1:30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。1:31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。1:32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」1:34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」1:35 御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。1:36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。1:37 神にとって不可能なことは一つもありません。」

マリヤの質問は何だったでしょう。マリヤは御使いに「処女の私にどうしてそんなことが起こるのか」と尋ねました。マリヤはどうやってそんなことが起こるのか知りたかったのです。御使いの答えは、神に不可能はない、でした。私たちが永遠を神と過ごせる道を、神は与えようとしてくださいました。その第一歩がイエスのご降誕です。神は、処女からイエスを生まれさせ、不可能に思えることを可能になさいました。他にそのようなことができる神はありません。神のみが不可能を可能に変えることがおできになります。神は、私たちが神を知れるようにして下さっただけでなく、私たちを罪から救うこともお出来になります。私たちは罪によって神から引き離されています。神がどれほど私たちとともにいることを望んでくださっても、私たちがどれほど神とともにいることを望んでも、罪がそれを阻みます。人は良い行いによって神に近づこうと試みますが、その溝を埋めることはできません。

ルカの福音書には、自力で神に近づこうとした人の話があります。

ルカ 18 : 18-27

18:18 またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」18:19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。18:20 戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」18:21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、

小さい時から守っております。」 18:22 イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」 18:23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。 18:24 イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。 18:25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」 18:26 これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」 18:27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」

これは、金持ちの若者の話です。この若者はイエスのもとへ来て、どのようにしたら救われるか教えてもらおうとしました。永遠の命を得る方法を知りたかったのです。イエスは、十戒を知っているだろうとおっしゃいました。若者は、十戒は昔からずっと守っていると答えます。イエスは、永遠の命を受けるためにもうひとつしなければならぬことがあるとおっしゃいました。自分の持っている物をすべて売って貧しい人に与えたなら、天に宝を積むことになると言われました。若者はこれを聞いて悲しみました。とても裕福だったので、富をすべて捨てることができなかつたからです。こうして彼はイエスの前から去りました。イエスは、らくだが針の穴を通るほうが、金持ちが神の国に入るより簡単だと人々におっしゃいました。

人々は、それなら誰が救われるのかと思いました。イエスは、人には不可能なことでも、神には可能であるとおっしゃいました。私たちがどれだけ良い人になっても、自力で神に近づくことはできません。けれども、神が私たちを愛してくださっているおかげで、人は救われます。救いは主の働きです。主が不可能な御業をなしてくださるのです。神の御力と恵みによって、人は悔い改めてイエスに従うことができます。救いの証はいくらかもあります。私の祖父について話すこともできるでしょう。私たちが祖父がクリスチャンになることを長年にわたって祈りました。この教会でイエスと出会った人たちの証をご紹介しますこともできます。今日は、3人の青年がイエスと出会ったお話をしたいと思います。

この3人の青年がイエスと出会うのは、きっと無理だろうと思われました。3人は十代で、私たちは10年前にこの日本で彼らと出会いました。私たちは日曜の夜に若者向けの礼拝を行っていて、3人もその礼拝に誘いました。最初の出会いは、この3人がバスの中で幸子におもしろい顔をしてきたことです。私たちが幸子にチラシを渡すと、幸子はこの3人のもとへ歩いていき、そのチラシを渡しました。3人がチラシを捨てるのか、本当に来てくれるかまったくわかりませんでした。この3人は典型的な日本人のおとなしい青年ではありません。高校を中退して荒れた生活を送る若者でした。チラシを渡した直後の日曜日、彼らはやってきました。毎週毎週彼らは来て、聖書の話に耳を傾けました。毎週毎週、神が彼らを愛しておられることを聞いたのです。メッセージが彼らの心に届いているかどうか私たちにはわかりませんでした。彼らは友だちや兄弟も礼拝に連れて来るようになり、友だちも兄弟も神の愛について聞くようになりました。私たちがよい影響を与えることができているのか当時はまったくわかりませんでした。後になって、彼らがイエスを救い主として受け入れ、人生が変わったということを知りました。

不可能に思えたことが、神によって可能になったのです。私たちがどのような影響を与えることができるか、自分ではわかりません。近所の人や両親に蒔いた種は、神の助けによって芽を出すでしょう。ですから、周りの人に神の愛を分かち合うことを続けてください。自分ではわからなくても、相手に良い影響を与えていることがあります。

最後に皆さんにお尋ねします。今日お話した神を皆さんが知っているなら、神が与えてくださった約束をしっかり握っていますか。神が私たちを守りたいと願ってくださること、不可能を可能にしたいと願ってくださっていることを事実として受け止めていますか。ここにいる皆さんの中に、今お話した神を知らないという方がいらっしゃいましたら、今日がその神を知るチャンスです。礼拝後、会堂の後方で係の者が待機しております。神とどうやって出会うのか、喜んでお話いたします。では、祈りましょう。